

会長要望演題

会長要望演題1 (II-YB01)

カテーテルインターベンションの今後

座長: 葎葉 茂樹(埼玉医科大学国際医療センター 小児心臓科)

座長: 杉山 央(東京女子医科大学心臓病センター 循環器小児科)

Fri. Jun 28, 2019 8:30 AM - 9:20 AM 第4会場 (中ホールA)

[II-YB01-03] 新生児・乳児早期ファロー四徴症における早期経皮的肺動脈弁形成術

○宗内 淳¹, 渡辺 まみ江¹, 杉谷 雄一郎¹, 川口 直樹¹, 松岡 良平¹, 山口 賢一郎³, 熊本 崇⁴, 清水 大輔⁵, 岡田 清吾⁶, 合志 光史⁷, 落合 由恵² (1.九州病院 小児科, 2.九州病院 心臓血管外科, 3.NHO小倉医療センター 小児科, 4.佐賀大学 小児科, 5.産業医科大学 小児科, 6.済生会下関総合病院 小児科, 7.中津市民病院 小児科)

Keywords: カテーテル治療, Fallot四徴症, 肺動脈弁

【目的】 新生児および乳児早期(生後60日以内)のファロー四徴症(TOF)における早期経皮的肺動脈弁形成術(BPV)の効果を明らかにする。

【方法】 2006年以降入院した新生児・乳児早期 TOF49例中、チアノーゼの有無に関わらず、肺動脈弁輪径 Z値 ≤ -2.00 であった36例を対象とした。同意を得た31例に対して早期 BPVを実施した。生後6か月以内の外科的治療介入回避をエンドポイントとして、治療効果の有無による2群間で肺動脈弁輪径 Z値や漏斗部形態等を比較検討した。漏斗部形態は造影所見から重症(漏斗部長の1/3に狭窄あり)、中等症~軽症(それ以外)に分類した。

【結果】 BPV実施日齢19(14-33)、体重3.34(3.02-3.65)kg、酸素飽和度87(81-91)%、肺動脈弁輪 Z値-3.56(-4.15--2.62)、PA index128(102-157)mm²/m²、バルーン径/肺動脈弁輪径比1.45(1.34-1.54)であった。全例手技は成功し、16例(52%)で有効であった。治療効果有無に関する2群間比較では、日齢(P=0.127)、体重(P=0.058)、酸素飽和度(P=0.075)、肺動脈弁輪径 Z値(P=0.827)、PA index(P=0.835)、バルーン径/肺動脈弁輪径比(P=0.514)に有意差はなかった。しかし漏斗部形態(重症:中等症~軽症, 8:8vs13:2, P=0.034)に有意差を認めた。漏斗部重症狭窄例でもチアノーゼのない(酸素飽和度 $\geq 90\%$)7例において生後30日以内に予防的にBPVを実施し、5例(71%)で6か月以内の外科的治療介入を回避できた。

【考察】 新生児・乳児早期 TOFにおける早期 BPVは約半数で早期外科的治療介入を回避する効果があり、漏斗部形態が治療効果に影響していた。漏斗部形態が重症狭窄例では、生後チアノーゼがなくとも漏斗部狭窄が進行する前にBPVを行う必要があるかもしれないと考えた。